

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

孟宗(まうそう)はいとけなくして父(ちち)におくれ、一人の母を養へり。母年老いて、つねに病(い)みいたはり、食の味はひ

も、度(たび)ごとに変わりければ、よしなきものを望めり。冬のことなるに、竹の子をほしく思へり。すなはち、

孟宗、竹林に行き求むれども、雪深き折(をり)なれば、などかたやすく得べき。「ひとへに、天道(てんどう)の御あはれみ、

を頼(たの)み奉る。」とて、祈りをかけて、おほきに悲しみ、竹に寄り添ひけるところに、にはかに大地開けて、

竹の子あまた生(う)ひ出でにけり。孟宗、おほきに喜び、すなはち取りて帰り、あつものにつくり、母に与

へければ、母、これを食して、そのまま病もいえて、(一生きをした)齡(とし)を延べたり。これ、ひとへに、孝行の深き心を

感じて、天道より与へ給へり。

〔御伽草子集〕から。

(注) 天道〓おてんとう様。ここでは神様。

あつもの〓野菜などを入れた熱いお吸い物。

(ア) 線1「一人の母を養へり。」とあるが、「孟宗」の「母」について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「母」は「父」を失ったことで病気になる、毎年冬になると食べているものの味がわからなくなるので、食欲がなくなっていた。

2 年をとっていた「母」はいつも「孟宗」の病気の看病をしていたが、ある冬、その病気を治すために手に入れにくい薬を求めて旅立った。

3 幼いころに「父」をなくした「孟宗」を「母」は一人で育ててきたが、年をとって「孟宗」を育てることが苦しくなっていた。

4 「母」は年をとり、病気のため食べ物を食べることに味わいが変わってしまったていて、手に入れにくいものをほしがった。

(イ) —線2「竹林に行き求むれども、雪深き折なれば、などかたやすく得べき。」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 竹林に行つて竹の子を探したけれど、雪が深いころなので、どうして簡単に竹の子が手に入るのだろうか。

2 竹林に行きたいわけでもないのに、雪が深いときに、どうしてわざわざ竹林に行かなければならないのか。

3 竹林に行き竹の子を求めていたが、雪が深いころだからこそ、誰もいないのですぐに竹の子を見つけられる。

4 竹林に行こうにも竹の子はないのだから、雪が深いときに行つても仕方がなく、行くべきではないだろう。

(ウ) —線3「孟宗、おほきに喜び」とあるが、「孟宗」が喜んだ理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「天道」にお祈りをしてみたものの何も起こらず頼りにならなかったが、自分で広い大地を探し続けた結果、たくさん竹の子を得ることができたから。

2 「天道」に毎日祈り続けていくうちに悲しみが和らぎ、竹を大切に扱っていたところ、突然大地が開けたあとでいきなり多くの竹の子が生えてきたから。

3 「天道」にお祈りをして、竹の子が手に入らないことを悲しみながら竹にもたれかかっていると、急に大地が広がって竹の子がたくさん生え始めたから。

4 「天道」に祈りが届かないことを悲しみ、ふと竹に向かって思いを告げてみたところ、大地が広がると同時に多くの竹の子を持った「天道」が現れたから。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「孟宗」は「母」の願い通りに竹の子を手に入れ、その竹の子でお吸い物を作って「母」に食べさせたところ、「母」は病気が治って長生きした。

2 ある冬、竹の子を食べたいと言い出した「母」の願いをかなえてあげるために、「孟宗」は「母」を連れて「天道」の元へお祈りに出かけた。

3 「孟宗」が「天道」にお祈りをしたことで、何も食べたくないと言っていた「母」の病気は治り、冬には竹の子が食べたいと言えるほどまでに回復した。

4 「天道」は「孟宗」が「母」のことを思つて孝行をしていることに深く心を打たれ、「母」の病気の治る特別なお吸い物を「孟宗」に与えた。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある河のほとりに、狼おはかみと羊、水を飲む事ありけり。狼は上（川の上流）にあり、羊は河裾（川の下流）にあり。狼、羊を見てかのそばに歩み近づき、羊に申しけるは、「汝何（注）の故にか我が飲む水を濁しけるぞ。」と言ふ。羊答へていはく、「我1この河裾にありて濁しける程に、いかでか河の上の障りとならんや。」と申しけれ

ば、狼またいはく、「汝が父、六か月前に河上に来たりて水を濁す。それによりて、汝が親の科（罪）を汝に（負わせるのだ）かくる。」と言へり。羊答へていはく、「我胎内にして父母の科を知る事なし。御免あれ。」と申しけれ

ば、狼怒りていはく、²「その科のみにあらず。我が野山の草をほしいままに損さす事奇怪なり。」と申しければ、羊答へていはく、「いとけなき身にして草を損さす事なし。」と言ふ。狼申しけるは、「汝何の故にか悪口を言ひけるぞ。」と怒りければ、羊重ねて申しけるは、「我悪口を言ふにあらず。そのことわり³

をこそ述べ候へ。」と言ひければ、狼の言ふやうは、「詮（要するに）する所、問答をやめて汝をこそ服（食ってしまおうか）すべけれ。」となむ言ひける。

（このまゝ）其ごとく、理非を聞かぬ悪人には、是非を論じて所詮（どうしようもない）なし。ただ權威（注）と堪忍（注）とをもつてむかふべし。

（「伊曾保物語」から。）

（注） 汝＝あなた。お前。

權威＝ここでは、信念を貫くこと。

堪忍＝ここでは、我慢をすること。

(ア) ー線1『我この河裾にありて濁しける程に、いかでか河の上の障りとならんや。』と申しければ」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「羊」が「狼」に、「私がこの川の下流の濁った水をきれいにしたら、川の上流のあなたがお礼をしてくれるのでしょうか。」と言ったので

2 「羊」が「狼」に、「私がこの川の下流に下りる間に水を濁したからといって、果たして川の上流が濁るのでしょうか。」と言ったので

3 「羊」が「狼」に、「私がこの川の下流で濁った水を飲もうとしたときに、なぜ川の上流のあなたの許可が必要なのでしょうか。」と言ったので

4 「羊」が「狼」に、「私がこの川の下流で水を濁しているからといって、どうして川の上流のあなたの迷惑になるのでしょうか。」と言ったので

(イ) ー線2「狼怒りてはいく」とあるが、「狼」が怒った理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「狼」が「羊」に、「羊」の親の犯した罪を負わせると言ったところ、「羊」は、その頃自分は「母」のお腹の中にいたので、自分の「父」と「母」の罪を知らないと言えたから。

2 「狼」が「羊」に、「羊」の親が犯した罪について尋ねたところ、「羊」は、「母」のお腹の中にいたときは何もわからないとごまかし、「父」と「母」のことをかばったから。

3 「狼」が「羊」に、「羊」の親の犯した罪を負わせると言ったところ、「羊」は、「母」のお腹の中に自分がいたときは、「母」は何も罪を犯すようなことはしていないと答えたから。

4 「狼」が「羊」に、「羊」の親の犯した罪について尋ねたところ、「羊」は「母」のお腹の中にいたことを忘れてしまい、罪のことは覚えていないと謝りながら許しを求めてきたから。

(ウ) ー線3「そのことわりをこそ述べ候へ。」とあるが、その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「羊」は、「狼」が野山の草を欲しいことを知らなかったので、申し訳ないと述べた。

2 「羊」は、「狼」を悪く言った記憶がないので、「狼」の聞き間違いではないかと述べた。

3 「羊」は、自分には水を濁した罪や野山の草を食い荒らした罪がない理由を述べた。

4 「羊」は、悪口を何度も言うのを避けたので、言い合うのを止めませんかと述べた。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 ある川のとおりで「狼」と「羊」は水を一緒に飲むことがあったが、あるときから、「狼」は川上で「羊」は川下でそれぞれ分かれて飲むようになった。

2 「狼」は、「羊」の「父」が六か月前に川の上流にやって来て飲む水を濁していったと主張したが、六か月前、「羊」は「母」のお腹の中にいた。

3 「狼」は野山を自分のものだと思っており、まだ幼かった「羊」が野山に入って草を食い荒らしていたのを見て腹を立てたが、注意しそになっていた。

4 物事の道理がわからない「狼」に対して、悪口に耐えながら自分の信念を貫いて理解を求めた「羊」の言動から、対話の大切さを説いている。

問二 (ア) 4 (イ) 1 (ウ) 3 (エ) 1

問二 古文

本文の現代語訳は、おおよそ次のとおりです。

〈孟宗は幼くして父をなくし、一人の母を養っていた。母は年をとり、いつも病気で苦勞して、食べ物の味いも食
べることに変わっていたので、手に入れにくいものを望んだ。冬なのに竹の子をほしく思った。すぐに、孟宗は、竹
林に行って（竹の子を）採したけれど、雪が深いころなので、どうして簡単に得られるだろうか。「ひたすら、神様
のお恵みを頼み申し上げます。」と言って、お祈りをしてとても悲しみ、竹にもたれかかっていると、急に大地が広が
り、竹の子がたくさん生え始めた。孟宗はとても喜び、すぐに（竹の子を）取って帰り、お吸い物を作って母に与え
たところ、母はこれを食べ、それによって病気が治り、長生きをした。これは、ひたすら孝行の深い心を感じて、
神様がお与えになったのである。〉

問二 (ア) 4 (イ) 1 (ウ) 3 (エ) 2

問二 古文

本文の現代語訳は、おおよそ次のとおりです。

〈ある川のほとりで、狼と羊が水を飲むことがあった。狼は川の上流にいて、羊は川の下流にいた。狼は羊を見て、
そのそばに歩いて近づき、羊に「お前はなぜ私の飲む水を濁したのだ。」と言う。羊が答えて、「私がこの川の下流に
いて（水）を濁しているからといって、どうして川の上流の迷惑になるのでしょうか。」と言うと、狼はまた、「お前
の父が六か月前に川の上流に来て水を濁した。そのため、お前の親の罪をお前に負わせるのだ。」と言った。羊は答
えて、「私は、（まだそのころ母親の）お腹の中にいたので、父と母の罪を知ることはありません。お許ください。」
と言ったところ、狼は怒って、「その罪だけではない。私の野山の草を勝手に食い荒らすことはけしからん。」と言
ったので、羊は答えて、「（私は）幼い身なので草を食い荒らすことはありません。」と言った。狼は、「お前はどうし
て（私のことを）悪く言うのだ。」と怒ったので、羊は重ねて、「私は（あなたを）悪く言っているのではありません。
（自分には罪はないという）理由を述べているのです。」と言ったところ、狼は「要するに、問答をやめてお前を食
てしまおうか。」と言った。

このように、（物事の）道理がわからない悪人には、（物事の）良し悪しを話し合ってもどうしようもない。ただ、
信念を貫くことと我慢をすることによって、対応するべきである。〉